

出張報告

**日本福祉のまちづくり学会・第14回全国大会に参加して
テーマ「移動の自由がつむぐ心豊かな社会—ひと・まち・文化—災害に強いまちづくりをめざして」**

八木三郎

8月27日から29日まで、日本福祉のまちづくり学会主催の全国大会が堺市において開催された。この福祉のまちづくり学会は1995年1月の阪神淡路大震災の復興支援活動を契機に全国的な福祉のまちづくりの活動の連携と学術研究を目的として、専門分野の横断組織として1997年に設立されている。当初は「福祉のまちづくり研究会」という任意団体としてまちづくりの研究とその活動を推進してきたが、2011年4月に「一般社団法人日本福祉のまちづくり学会」として新たに生まれかわった。この学会は、多分野における研究者の協働、連携を最大限に生かし、すべての市民生活の安全・安心を活動の柱として、我が国の福祉のまちづくりの発展に寄与する研究理念・目標を掲げている。

毎年開催されるこの全国大会は、法律家や社会福祉関係、その他工学関係等の異なる専門分野の人たちが集結し、さまざまな角度から「福祉のまちづくり」について研究・開発し、その成果を発表する場として、また福祉のまちづくりのあり方を考える機会の一つとして開催されている。

(5頁からの続き)

んろだいを間近で拝することができない人が大多数である。このような状況において、天理教を信仰することはどういうことなのか、改めて考え直す必要があるように感じる。

この「天理異文化伝道の諸相」は、「天理教の海外伝道史を概観すると、伝道史実の記録や、個人の伝道者の伝記などが数多く見られる。しかし、意図的に海外伝道を、異文化接触の視座から調査研究した文献はほとんど見られない。」(『グローバル天理』第1号、井上昭夫)というところから、この『グローバル天理』発行と同時に始められた。36回までは、堀内みどり氏が「天理教のコンゴ伝道」と題して、コンゴ伝道の発端からノソング・アルフォンス4代会長就任までの歴史を振り返った。またそれを受け継いだ形で私は、「コンゴ伝道に見る異文化接触」と題して、コンゴ伝道に携わった人たちの証言や自身のコンゴ伝道の経験を基に、異なる文化の接触という視点で話を展開してきた。これまで、コンゴでの伝道活動の中で見られる言葉や文化、価値観、経済格差、社会や政治的背景などに起因するさまざまな事象について考察した。また後半は、4代会長就任と共に設立されたコンゴブラザビル出張所以降の歴史を年代順においつつ、その中で起こったいろいろな出来事や問題を検証し、そこから天理教の海外での伝道のあり方に対するさまざまな問題点にも触れてきた。

一つの伝道の歴史には、成功したこともあれば失敗したこともある。それは試行錯誤の繰り返しであるかもしれない。そして現在もまた未来も繰り返されていくことだろう。こうしたことを一つひとつ検証することこそ、これからの伝道のあり方を

1日目は、福祉機器、建築・住環境、視覚障害者と誘導支援、災害・震災、まちづくり、交通・移動、教育、地域社会ほか合計19のセッションに分かれて研究発表が行われた。

2日目は、今回の重要なポイントである特別研究討論会「東日本大震災を経て：福祉・まちづくりの新生にむけて」をはじめとして、「交通バリアフリーの総括」、「障害者差別禁止法」、「交通基本法」等のセッション別のパネルディスカッションが行われた。そして、2日目の締めくくりとして、市民公開シンポジウムが行われた。ここでは「移動の自由」に焦点をあて、本大会のテーマに掲げた心豊かな社会、ひと・まち・文化を構築するためには福祉のまちづくりはどうあればいいのかについて、午前の各討論会の報告をまじえ、熱心にディスカッションが行われた。

3日目は、福祉のまちづくり環境の体験見学会(ユニバーサル・サイクル体験等)が催され、参加者はそれぞれ希望するコースに参加し、その後閉幕となった。

本大会は、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって被害を受けた地域、被災者の状況を国・自治体・市民・研究者などそれぞれの専門分野から検証し、総力あげて復旧、復興への歩みについて熱心に議論が交わされた大会となった。またそれは、単なる復旧を意味するのではなく、新たな福祉のまちづくりに向けて多くの知恵の結集が不可欠であることを確認した大会でもあった。

考える上で重要なことであり、その検証は「〇〇が悪かった、〇〇は良かった」という個人批判をすることでは決してない。批判されるべきことはむしろ、このような検証を行わず、言い換えるなら過去の貴重な体験を活かさずして、同じ失敗を何度も繰り返すことではないだろうか。

コンゴの伝道に関わってきた者の一人として、また現在も関わり、これからも関わっていく一人として、このような検証の場を得ることができたのは大変有りがたいことであった。コンゴブラザビル教会は今日も活動を続け、一步一步前に向かって進んでいる。その歩幅は狭くとも、またその道のりははるか長いだろうけれど、彼らと共に歩む中で、また何時の日かこの続編が書けるようになることを願い、このシリーズを終えることにする。ありがとうございました。



コンゴブラザビル教会から5人が受講している今年9月から始まった修養科フランス語クラス



特別講座「東日本大震災における天理教の救援」の報告

金子 昭



8月27日、天理大学9号棟（ふるさと会館）ホールを会場に、夏期特別講座「教学と現代Ⅷ」を開催した。今回は、3月11日に発生した東日本大震災の際の天理教の救援活動をテーマとして、緊急企画「東日本大震災における天理教の救援—全教あげての活動と今後の課題を考える—」を取り上げ、一般公開の形式で行った。

最初に、震災で犠牲になった人々への追悼と被災地の一日も早い復興を願い、参加者全員で黙禱を行った後、3つの講演とパネルディスカッションが行われた。



午前の部では、第1講として、平澤勇一・天理教福島教区長が「被災地からの報告—現状と課題」と題して講演した。東北の被災県のうち、福島県の場合、地震、大津波、原発事故、そしてこの原発事故に伴って生じた風評被害および離散被害という5つの被害に見舞われるという、厳しい状況の下にあって、その困難なものともせず、教会本部や災救隊、教区管内の支部や教会単位、県外からの有志による本教のさまざまな救援活動が行われたことを報告。また、信託者として、全国の教友が祈ってくれたことがとても力強い支援になったことを述べた。



第2講は、本研究所の佐藤孝則教授による「原発事故による環境汚染の影響」。原発政策には温暖化問題の“切り札”として推進されてきたが、その技術水準の高さとは裏腹に、その管理体制は非常に低く、産官学の癒着構造と隠蔽体質という問題があった。佐藤教授は、福島第一原発事故後の動向を報道面から検証すると同時に、実際に現地でも放射線量の測定調査を行い、その環境汚染の状況と影響について報告。今後の復旧・復興に向けて、人々の“絆”の再生と回復の可能性について強調した。



午後の部では、第3講として、田中勇一・災救隊本部長が「天理教災害救援ひのきしん隊の活動」を講演。講演に先立って、災救隊活動の記録ビデオが上映され、岩手・宮城・福島各県の被災地での給水や炊き出し、瓦礫撤去などの活動の様子が映像で紹介された。田中本部長は、3月11日の震災発生直後の対策本部の立ち上げから始まって、災救隊本部として実際に活動するに至るまで

の初動状況、また災救隊としての基本的態勢や実働の様子、さらには自ら先頭に立って動いた活動のエピソードなどを詳しく説明した。とりわけ、災救隊のひのきしん活動は、「親神様のご守護に対するご恩報じ、つまり“お礼の行為”として活動している」ことを強調した。

最後に、パネルディスカッション「大震災の「節」から「芽」を出すために」が行われた。

発題者は、大谷将司・災救隊岩手教区隊長が「岩手県からの報告」、高橋伸実・ボランティア団体「ひのきしん」代表が「宮城県からの報告」、そして池田真教・災害対策本部心のケア対策室子供会スタッフが「被災地での心のケア」について、それぞれ報告。これらの発題に対して、渡辺一城・天理大学准教授が社会福祉の視点からコメントを行った。

大谷隊長は、大津波で大きな被害を受けた地元の釜石市内で、直ちに活動を開始した状況について報告。いち早い出勤が可能になった理由として、ふだんの訓練や過去の実働の経験から、県の社会福祉協議会や釜石市から大きな信頼を得ていたことが挙げられると説明した。高橋氏は、避難所での被災者の厳しい状況を目の当たりにし、メールを通じて教友に救援物資を依頼したところ、次々に支援の輪が広がっていったことについて触れ、人々の心に明かりを灯すことの大切さを強調した。池田氏は、避難所などを少年会スタッフで巡回し、子どもたちと一緒に遊ぶことを通して、その「あそび」の輪が子どもだけでなく、その親や周囲の大人たちにもほのぼのとした癒しを与えていったことを、幾つかの実例を紹介しながら報告した。

渡辺准教授は、これらの発題を踏まえ、被災地での宗教の関わりでは、実は天理教が一つのモデルにもなっていること、また災救隊の活動もまた被災地の人々にとっては心の支援にもなっていること、そして日頃から地元や行政との関係があればこそ、いざというときに成果を出せることを指摘した。その後の会場とのやり取りでは、支援活動がきっかけで初めておぢばがえりをされた方や、宗教の社会貢献活動について取材が続いているジャーナリストの北村敏泰氏から貴重なコメントが寄せられた。特に北村氏は災救隊の活動内容に触れ、その組織性、行動力、装備に加えそれぞれが有する熱意に感心したという。そして、その発露が単に人を助けたいという「ボランティア」の発想ではなく、自らの信仰に根ざしたお礼の行為である点に、確かな宗教性を認めることができ、災救隊の日頃の訓練の積み重ねの素晴らしさがこの活動につながっていると評価した。



パネルディスカッション
(右から) 大谷将司氏、池田真教氏、高橋伸実氏、渡辺一城氏

日本宗教学会第 70 回学術大会に出席

堀内みどり

標記学術大会が関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスを会場に、9月2日から4日にかけて開催された。台風12号が迫る中、多くの研究者が集まり、275の個人発表と15のパネル発表があった。

2日午後、学術大会の開会式に続き、「宗教の創りだす絆—信仰による交わりの意義と可能性」をテーマとした公開シンポジウムが行われた。モデレーターを務めた對馬路人関西学院大学教授は、「近年、教団組織の拘束を嫌い個人による自由な靈性の探求を志向する傾向、すなわち宗教意識や行動の個人化や私化の傾向がしばしば指摘されている。また一方で『カルト問題』では、信仰集団において生じた内閉的な、あるいは絶対帰依的な関係性がもたらす危うさが厳しく問われた。果たして宗教は人と人をつなぐ絆を失いつつあるのだろうか。また、信仰の創りだす絆は、現代においては自立した人々の開かれた関係性とはなじまないものなのであろうか。」と問いかけ、「今、東日本大震災という未曾有の災害に直面する中で、改めて宗教信仰の創りだす絆の意義や問題点、あるいは宗教信仰の違いを超えて人々をつなぐ可能性や課題について問い直してみたい。」とシンポジウムへの期待を語った。その後、以下に示す4名のパネリストの発題があった。

- ・中道基夫（関西学院大学）
「Indigenization, Inculturation から Interculturation へ」
 - ・渡辺順一（金光教羽曳野教会）
「繋がり喪失の時代における宗教運動の課題—「宗教」を人々の「痛み」の側にどう開いていくのか—」
 - ・三木英（大阪国際大学）
「宗教的ニューカマーと地域社会—外来宗教はホスト社会といかなる関係を構築するのか—」
 - ・小杉泰（京都大学）
「現代宗教としてのイスラーム—世界的なウンマとモスクを中心とする地域コミュニティ」
- なお、天理大学関係の発表者は以下の通り。
- ・松田健三郎
「『相関』という問題について」
 - ・島田勝己
「クザーヌスの認識論と宇宙論—〈否定神学〉を可能にするもの—」
 - ・澤井義次
「井筒俊彦の神秘主義論とその意味構造」

- ・岡田正彦
「近代仏教と須弥山儀—近代の自然観と仏教—」
 - ・山田政信
「日本産ブラジル系プロテスタント教会信者のブラジルへの再適応」
 - ・芦名裕子
「ハーレムの黒人教会を考える」
 - ・堀内みどり
「宗教における“女”の伝統—天理教婦人会についての一考察—」
- また、天理教が発表題目に入っていた発表が二つあった。
- ・熊田一雄（愛知学院大学）
「不安障害と日本の宗教—天理教の事例から—」
 - ・永松和郎（九大）
「翻訳と布教—タイにおける天理教の事例から—」

日本印度学仏教学会第 62 回学術大会に出席

堀内みどり

標記学術大会が龍谷大学大宮学舎を会場に、9月7日8日に開催された。10の部会に分かれ、249の個人研究と6つのパネルの発表があった。

(9頁からの続き)

ために前夜祭は途中で打ち切られた。その後雨は上がり、多くの若者は街に繰り出し、歌って、踊って夜を過ごした。休んだ時間はわずかのようだ。

最終日は、マドリッドのクワトロ・ビエントス空港（サッカー競技場を4カ所合わせた広さ）で、ローマ法王を中心にして、野外ミサが開かれた。200万人の若人が集った。予想では100万人と言われていた。実に予想の2倍の青年が集ったのだ。法王は青年に向かって次のように話した。「不幸はあなた方を不自由にはさせない。世界に対して、将来に対して、さらにあなた方の弱点に対して恐れを抱いてはいけない。未来はあなた方のものだ。」

ローマ法王は滞在4日間の全日程を終え、疲労困憊になったようだ。84歳の法王にとっては当然かもしれない。その反面予想外の200万人が、5大陸、193カ国から集った。こんなことは現法王の生涯でも初めてのことで、一度にこれだけの人がマドリッドに集ったのは初めてだ。この映像はテレビで世界に流れ、カソリックの強さを誇示できたようだ。教会は神に繋がっている。キリストを教会から引き離すことは不可能である。

次の第27回世界青年大会は2013年、ブラジルのリオ・デジャネイロで行うと宣言して大会は幕を閉じた。

グローバル天理
第12巻 第10号 (通巻142号)

2011 (平成23) 年10月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080
FAX 0743-63-7255
URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>
E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan